

## 安全への提言



## 「安全にする」という行為の共通基盤

あき 秋      た 田      か ず 一      お 雄\*

近頃は、食品、医療、交通、原子力、建築物などの多くの分野で安全問題がジャーナリズムを賑わしている。そこでは領域を問わず安心して住める社会環境を求めて「安全にする」という人間の行為が求められる。では、このような広汎な領域にわたる安全を考える上で、その根底にはなんらかの共通した基本概念があるのだろうか。実務的には安全はすべて個別の問題で、固有技術の上に成り立つとすれば、これがないと広汎な安全の問題は論じられないことになる。そのため、ここでは「安全にする」という行為を、つぎの二つの視点から模索してみたい。その一つは、「安全にするにはどうすればよいか」という方法論の問題であり、もう一つは、「安全にするとはどういうことか」という行為の本質にかかわる問題である。この二つに論理的な共通項があれば、それが「安全にする」という行為の基礎概念になる得ると考えるからである。

そこで、まず「安全にするとはどういうことか」から考えてみると、これは以前にも記したように（本誌37巻216頁）、われわれがなにかある目的を達成しようとするときに、そこに含まれる多くの価値の中から「安全という価値」を選択して付加する行為といえる。しかも、それら多くの価値は論理的には序列がつけられないという意味で等価であるから、安全にするという行為は、煎じ詰めれば「等価な価値の間の選択問題」に帰着する。しかも、ここでは両立しない価値も多いから、選択に際しては、どれを優先するかの価値判断が必要となり、そこでは自らの思想や知識、情報が欠かせないことになる。

これに対して、「安全にするにはどうすればよいか」という方法論は、理念的な方策から実務的な手段に至るまで多彩であり、これを簡単に定義付けすることは難しい。そこで、ここでは話を絞り、これには判断だの選択という人間行為が含まれるかどうかを考えてみると、多くの方法論ではこのような視点はきわめて乏しい。この理由は、その方法論に内在する論理や手法が価値中立的な自然科学に依存するところが多く、ま

た、事故という現象の客観的な解明に偏り過ぎていたからではないか。つまり、方法論自体に人間がかかわらないため、選択なる行為の入り込む余地がなかったということである。しかし、「安全にする」という行為は人間がするものである限り、たとえ手法やデータは客観的で価値中立的であっても、それを適用する段になると、それに関連する事象や因子には多くの人間や社会にかかわる価値が含まれるから、意識するしないは別として、そこでは選択や判断の問題が入り込むことを避けられない。このことは、いま安全のために優れた技術的方策があったとしても、それを実施するのに大きな費用がかかったり、便利さが低下するということになれば、そこでは安全性と経済性や利便性という価値の間の選択を迫られることを考えても容易にわかる。

さらに、この考え方は、これも前に述べたように（本誌39巻87頁）、「安全にする」つまり事故の発生を防ぐには、この領域が事故の原因系と現象系の境界にあるゆえ、自然科学で扱える「現象系」の延長線上でこれを捉えようとする科学技術的なアプローチ（予防）と、人や社会が密接に関係する「原因系」からする社会学的なアプローチ（未然防止）の二つがあり、そこでは双方向からのアプローチが必要で、前者だけでは問題は解決しないことも関係している。

かくて、このように見てくると、この二つの視点は終局的には同じ基底をもち、「安全にする」という行為には、すべて「価値の選択」という共通概念が介在することがわかる。その点、われわれが多岐多様な安全問題を考えるに当たっては、価値の選択という共通基盤を踏まえ、倫理、責任、公共性、豊かさなどのような広汎な価値をも含めて問題を考えるとともに、それに対応できる価値観や思想をもつことが重要となつてこよう。おそらく、なんらかの共通基盤なしには、安全問題はいつになっても論理的に収束しないのではないだろうか。

\* 〒158-0083 東京都世田谷区奥沢1-55-15